

## 2012 年度前期授業評価アンケート集計結果に対するコメント

—社会イノベーション学部—

社会イノベーション学部長 篠原 光 伸

今年度より昨年同時期との経年比較が可能となり、その比較において特筆すべきこととして、全ての設問項目において前年同時期の評価結果を上回るスコアとなったことが挙げられる。学生・教員の双方においてスコアの向上が見られたことは、学部教育の質的保証という観点からも大変好ましいことだと考えられる。

今回、スコアの上昇が顕著に見られた項目は、「予習・復習をよくした (0.25 ポイント)」、「教員は発言・議論など授業参加を積極的に促した (0.21 ポイント)」、「教員の話し方 (0.17 ポイント)」である。学生による自律的な取り組みは、本学のカリキュラムポリシーとも密接に係わる極めて重要なポイントであり、このような良好なフィードバック効果が、今後もしっかりと継続されることが期待される。

2012 年度前期アンケートの対象となったのは 41 科目であり、これらすべての科目から回答を得ることができた。調査対象となっている科目の全履修者数は 2,872 名 (前年同比: +222 名) であり、これに対しアンケートに回答した者は 1,625 名 (前年同比: +55 名) であった。

設問毎に今年度の特徴について述べていく。【設問 1】の出席率に関しては、平均値は 4.40 (前年同比: +0.02) であり、多くの学生が熱心に授業に出ていることが窺える。「90%以上」と回答した者は 880 名 (前年同比: +24 名) であり全体の 6 割を占めている。また、「89~80%」と回答した者は 358 名 (前年同比: +17 名) であり全体の 25% (前年同比: +0.5%) を占めている。昨年同様に良好な修学状況が保たれている。

【設問 2】の授業への意欲については、意欲的に取り組んだとする者は 577 名 (前年同比: +61 名) で 38% (前年同比: +3%) を構成しており、分布を見ても高スコアの側に回答者が集中しており、昨年と比べて学生達が授業へより積極的に関与している。

【設問 3】の授業時間の有効活用については、高く評価をする者は 677 名 (前年同比: +57 名) で、全体の 44% (前年同比: +2%) と最多である。昨年と比較してもその数と割合の両方において向上が見られる。

休講の多さ等を尋ねる【設問 4】では、「そう思わない」と回答した者は 912 名 (前年同比: +110 名) で全体の 60% (前年同比: +6%) を構成し、分布全体でも休講や遅刻は非常に少ないと評価されている。

【設問 5】の教員の話し方については、はっきりと明瞭であるとした者は 636 名 (前年同比: +101 名) で全体の 41% (前年同比: +5%) であった。反対に、あまり明瞭でないとした者は 134 名 (前年同比: -64 名) であり、全体では 9% (前年同比: -4%) と、昨年と比べ大幅に低下している。

【設問 6】の授業レベルの適切性であるが、適切であると回答した者は 468 名 (前年同比: +104 名)、30% (前年同比: +5%) であった。昨年と比べて学生からの評価の向上が顕著に見られる項

目の1つである。

【設問 7】の教室内環境については、高い評価をした者は合計すると 1,191 名（前年同比：+64 名）名と全回答者の 77%（前年同比：+1%）であり、今後も現状の維持・向上を心掛ける必要がある。

【設問 8】の授業に対する教員の熱意については、高い評価をした者が 77%（前年同比：+4%）、そのうち最も高く評価した者 646 名（同前年比：+103 名）、42%（前年同比：+5%）となった。教員の熱意がより多くの学生達に確実に伝わっていることがデータの面からも裏付けられた。

【設問 9】の教員による授業参加への促進については、最も高く評価する者 478 名（前年同比：+116 名）、31%（前年同比：+6%）であり、学生のおよそ 1/3 は教員が授業参加を積極的に促していると評価している。教員の工夫により、授業における双方向性が高まりを見せているのであろう。

【設問 10】のシラバス内容と授業内容の整合性については、最も高い評価をした者は 619 名（前年同比：+93 名）、40%（前年同比：+4%）であった。これを含めて高い評価をした者は、全体の約 8 割を占めており、問題のないレベルにあると考えられる。

【設問 11】の授業への関心と学力増進については、最も高い評価をした者は 545 名（前年同比：+96 名）、35%（前年同比：+5%）で、これを含めて高い評価をした者は、全体の 7 割を占めている。授業内容は確実に学生の関心と学力を高めるものになっており、同時にその授業内容に毎年磨きが掛けられることで、学生の知的関心と考察力が更に優れたものとなっていると考えられる。

【設問 12】の総合的評価については、最も高い評価をした者は 670 名（前年同比：+113 名）、44%（前年同比：+6%）であった。これを含めて高い評価をした者は全体で 1,242 名（前年同比：123 名）、81%（前年同比：+5%）になっている。全体として、学部で提供している授業に対する評価レベルは、もともと非常に高い状況にあるのだが、経年比較によりさらに向上が確認された。

【設問 13】の板書・スライド内容の読みやすさについては、最も高い評価をした者は 500 名（同前年比：+88 名）、40%（同前年比：+6%）であった。これを含めて高い評価をした者は 866 名（同前年比：+88 名）、全体の 69%（同前年比：+5%）であった。教員による主体的な努力が、状況の改善に寄与していることを窺わせる。

【設問 14】の予習・復習状況については、よくしている者は 141 名（同前年比：+51 名）、12%（同前年比：+4%）しかいない。スコアは昨年より若干向上しているものの、まだまだ低い状況にあると言える。あまり予習や復習を行っていない者は 37%（同前年比：-9%）であったが、1 割程度の減少が見られたことは好ましいことである。何度も言うことであるが、大学の講義は予習と復習をセットにして考えられている。授業できちんとノートを取り、そのノートを図書館にある専門書などと照らし合わせ、内容を吟味し整理するといった知的作業は、学生には必要不可欠である。

【設問 12】に関しては付帯情報としてその他の設問との相関分析がされている。【設問 8】にある教員の熱意とこの項目との相関係数が 0.69、【設問 11】の関心や学力増進を尋ねた項目との

相関係数は 0.79 であり、これらは昨年とほぼ同じ傾向であった。今回の集計で新たに強い相関が見られるようになった項目は、【設問 5】の教員の話し方における明瞭性であり、その相関係数は 0.67 であった。授業における教員の熱意、学問的関心の喚起、そして学力増進といったことが、高い総合的評価に結び付いている。